
八百万ってたくさんって意味らしい

くずもち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

八百万ってたくさんって意味らしい

【Zコード】

Z3882BA

【作者名】

ぐずもち

【あらすじ】

変な爺さんに妙なものを押し付けられた。

なんでも魔法が使えるようになつたらしい。

その上異世界に誘拐されるという珍事に巻き込まれてしまったのだからたまらない。

ばかばかしいとは思いつつ紅野 太郎は実際に魔法を使ってみることにした。

この魔法、自分の魔力の量がわかるらしいんだけど……ちょっとばかり多すぎじゃないか？

異世界トリップものです。
主人公最強ものなのでご注意ください。

プロローグ（前書き）

初めまして & お久しぶりですぐすもむちです。
ファンタジーもの初めました。

オリジナル物書こうとしたら、頭の中こんがらがってきますね。
つたない文章でまつたりと行きたいと思しますのでよければどうか
よろしくお願ひします。
暇つぶしにでもなれば幸いです^ ^

プロローグ

深々と雨の降りしきる空。

力のない瞳で老人が一人、自室の窓から静かに雨粒を見上げていた。

ひんやりとした空気は、体温を少しづつ彼から奪っていく。

同時にそれは、彼に魂が抜け落ちていくような錯覚を覚えさせていた。

「もうすぐ終わりだの……」

そして一人、彼はその感覚に身をよだねながら呟くのである。

髪は白く草臥れ、蓄えた自慢の髪にもすでに艶はない。

顔色からは生気がまったく感じられないことだらう。

何とも情けない話だと自嘲気味にほほ笑んだ。

彼の命は今までに、この辺境の小さな小屋で終わりを迎えるところだった。

振り返ってみれば長くも短い生涯だったと物思いに更ける。

幸い、その時間だけは十分にあった。

彼はある王国に使える魔法使いだった。

高い魔法の素養のあつた彼は、幼い時から魔法を学び、さらなる高みを目指して世界を廻る旅をした。

その旅の途中ある国に属することになった彼は、高い魔力故に生きた数百年という長きに渡り、魔導の道を邁進し続けたことで有名だった。

結果的に優れた魔力は国を栄えさせるために大きく貢献した事は間違いないだろう。

その過程でいくつもの魔法を研究し、彼の英知は神にさえ届いたのではと噂された。

後進達の指導をし、国を導く守り手も育て上げることが出来たと自負している。

やれることはやった。

人生に悔いなどない……とは言い切れないが、満足出来る基準は満たしていると、床に伏した今なら割り切れもした。

思えば魔法一筋の人生だった。

そして魔道の探求も、彼自身納得の行くところまで達する事が出来たとうねぼれではあるかもしれないが、満足もしている。

ただ、このままではあっけない幕切れであるとは感じていた。

まだもう少しはあると思われた寿命は、戦争で受けた他愛ない古傷

によって、肉体的な死を迎えるつある。

となれば、とるべき道など限られるだろ。

いつも残り少ない人生を捨ててでも、己が生涯を懸けた魔導にこの命すら捧げてみせよ。

決心するまでに、そう時間はかからなかつた。

それから彼は國の者達に別れを告げ、この人里はなれた山奥にやつてきた。

目的は一つ、最後にして究極の研究を成し遂げるためだつた。

そしてその成果が今まさに形を成そつとしている。

間に合つた。

万感の思いを込めて彼は瞳を閉じた。

「魔法陣の動作確認……同時展開。……世界の番人よ、その門を開け。我が願いを聞き届ける。究極にして至高、我が生涯すらも飲み干す魔法を今ここに……」

床に伏したまま、彼は祈る。

ただ切に、最後の魔法の完成を。

魔法は彼のすべての命を吸い上げ、燃やしきくすだろ。

しかしそのことに一辺の悔いも残すつもりなどなかつた。

百凡の人間がいくら集まろうが到底なしえないであろう至高の魔法を持つて、すべての魔力を解き放つ。

老魔法使いを中心に、大地に刻み込まれた魔法陣が数キロに渡つて光を灯し、天すら埋め尽くす記号の群れが、光を空へと運んでゆく。

光は空を割り、扉を開くだろう。

こゝして老魔法使いの。

彼の生涯は幕を閉じた。

そして魔法は完成する。

彼の願いと共に……。

プロローグ（後書き）

とこづわけで初めて見ました。

二次創作で書いてみたことはあるんですが、今回はオリジナルです。

一話

「……なんだか半生を偉そつと詰られた気がする」

変な夢で田が覚めた。

しかし田が覚めたところには感覚がはつきしなかった。

そして、まざいがどいだかわからない。

右を向いても左を向いても、見たことも聞いたことも、ついでに言うなら床すらない七色の? ともかく謎と言つのがなによつぴつたり来る空間なのだ。

そんな謎空間にふわふわと浮いてくる。

なのこれ、意味わからん。

「……」

「……」

そしてなにがおかしこって、田の前にいるこいつがおかしい。

見知らぬ半透明の爺さんが浮いていた。

しかも鼻がくつつきそうな至近距離でだ。

「なんなんだこの状況……」

はつまうに思つて悪夢である。

しかも現状指一本動かせないとすれば、もうため息しか出でこなかつた。

「…………夢じやよ。」口はお前さんの夢の中じや。

「やうか……嫌な夢もあつたもんだな

「ひさやうと吐き捨てるよ」元気。

どうやら口だけは利けるらしい。

だが肝心の話しだけは、口を開いてもこととん意味不明だった。

それでも俺は何とか田の前の爺さんを理解しようとしたがんばってみたんだ。

それしか出来なかつたとも言つ。

見た田は長い黒髪に、ローブ姿といつ、いかにも魔法とか使つてきそうなデザインの爺さんだ。

しかしここが田が虚うで半透明なのが特別気にかかつた。

はるといふことである。

とこりかなんで半透明？ 近所のネコだつてもうひとつ存在感がある。

俺はそいつをく匙をあわつての方向に放り投げた。

わかるわけねえし。

俺、紅野 太郎は何の変哲もない大学生である。

そもそも、つこせつ きまで大学で講義を受けていたはずなのだ。
まあ少しばかり夢の世界に旅立っていたことは否定しないが……ともかく授業を受けていたことだけは間違いない。

それなのに、今は七色に輝く不思議な空間でジジイといっしょに漂つていると。

ひょっとしてあれか？

ちよつと閃いた。

守護霊とかこいつやつ。

これは居眠りした俺に、先祖のじいさまが夢枕に立つてお説教しに駆けつけてくれたんじゃないだろうか？

だとすればこいつは一つ、謝罪でもしておかねばならないだろう。

「これはこれは」先祖様。申し訳ありません。私めは授業中に居眠りなどしてしまいました。

正直に呟くと、今後いつこうしたことかがなことつに反省したしまやで、じうか成仏してくださんませんかね?」

「……わしゃ、別にお前の先祖の爺さんじやなこんじやがの?」

誠心誠意頭を下げたところに、爺さんは返すが如きまづいさひにまづいた。

「じつめい早とちりだつたよつだ。」

「ああ、わうなんだ。いや、たしかに変だとは思つたんだ。顔も見たことなかつたし」

「……適切なまづいなー」

「よく言われるナビ、廻所だと思つてゐる」

「じうなんじやねれ?」

呆れて首をかしづくる爺さん、俺は自信満々に頭こておいた。

「まあそれはこよ。といひでいひが夢ひては、よつせ田が覚めればこいんだよね?」

気楽にトキつ尋ねると、爺さんは想像に及して首を横に振った。

「……こや、残念ながらこの夢は覚める事はないわい」

「……なんで?」

「まあ、戸惑うのも無理はないがのう。だがこれまで『いへ幸運なことなんじやみへ』

「いや、やすがにふれかぬなど」

覚めない夢など死んでいるも同然じやないかと思うのだが。

しかもセクシーな美女となりともかく、こんな幽霊婦さんと永遠に夢の中など「めん被る」つたい。

趣味の悪い「冗談」と言うのならまだよかつたが、爺さんはそんな風で
もなかつた。

「正確に言うなら、今のおぬしは我が魔法の術中にある」

「はなわら」あさまつ

「……せつかちな奴じやのう」

不満そうじ口をとがらせる爺さんはともかく、何ともファンタジーな台詞に俺もまた一層うんざつしていた。

魔法だと？

何を馬鹿なという感じである。

格好が魔法使いっぽいからって、そんな設定まで凝らなくてもいいと思う。

ただ本当に頭が痛いのは、実際おかしなことになつてているのも確か

だといつことだらう。

「魔法……はともかく、なんの目的でこんなことを？」

とにかく現状を開拓する方法を目の前の爺さんなら持っているだろうと希望も込めて尋ねてみたのだが、いきなり爺さんは真剣な面持ちで力強く宣言した。

「单刀直入に言おう、わしの世界に来てもらひう。」

「え？ 嫌だけど？」

即答したら、爺さんはちょっと涙目になつた。

「……そんなすっぱり断らなくとも」

「いや、断るでしょ。俺、今花のキャンパスライフ真っ最中よ？」

あいつらと俺はさう付け足せてもういた。

こちとら春に入学したばかりの新入生なのだ。

つらく苦しい受験勉強が終わり、ようやくと束縛から解放されたといつのに、なぜ故にこんな不思議爺さんの戯言に付き合わねばならないのかと。

否、付き合ひ理由など欠片も見当たらない。

だからあいつらと拒絶したこと諦めて欲しかったのだが……。

爺さんは諦めるべきか「残念じゃの」自分の髪を扱きながら、いやつと向とも不敵に笑いやがったのである。

「ふむ……実はものす」ご特典も用意しておるござが？」

「……一応聞くだけ聞いてみるけど。なに?」

「「む、我が魔力をお前にひいて置いておる。」

「なにそれ、いらぬ」

再び即答すると、爺さんはものすく落ち込んだ。

「そんなばかな……。わし、世界でもっとも高名な魔法使いなんじやよ?」

その魔力をいらさんじやとへ。」

そんな焦点の合わない眼で呴かれても困ってしまうのだが。

「いや、そもそも魔法とかわけがわからなーいし、存在しないものをもらつても?」

はつかり言つてそんなもの、通販の幸運グッズ位はさん臭い。

速やかにお断りつつ、一応お年寄りとこいつともあつて懇切丁寧に説明すると、どうわけか爺さんは大いに驚き、目をむいていた。

「なんとー、」ひやりの世界には魔法がないのか！　不便な世界じや

の「ひー」

「いやいや、そこなのか驚くと」「ほひは？ 全然不便じゃないし。魔法がある方が不条理だと思つよ？ 科学的に考えて」

「ふむ……科学とやらがどうこいつのことは知らんが、それは魔力を使わぬ力なんじゃな？ しかしおかしいのう。お前さんからは並外れた魔力を感じる感じが……」

「やうなの？」

半ば適当に話を合わせていたのだが、気になる台詞があつたので反応してしまつた。

すると爺さんは俺の言葉に必要以上に食いついて、力強く同意してくれた。

「やうともー でなければわざわざ出向くわけがあるまことよ。」

「いや……そもそもあんた何のためここに来たんだよ？」

俺は爺さんから何か貰えるよつなかつながらないこと断言できる。

本音を言わせてもらひえば早々に終わらせて、早く帰つて欲しいのだけれど。

だが爺さんは露骨に肩を落としてため息をつくと、何やら語り始めたじやないか。

なんだかまた時間がかかりそうだと俺は確信した。

適当に聞くのが吉だな。

「……それはの「ハ。」れはわしの我儘などじゃよ」

「ほハ」

「わしほな？ とある世界で魔法使いをしておつたんじや」

「ふむ」

「そして人並みはずれた魔力と長年の鍛錬の結果、世界で類を見ないほどに強力な魔法使いとして尊敬を集めておつた」

「くえ」

「血櫻ではないが、我ながらものす」J一へ血國に貢献をしてきたと思ひ。しかし、そんなわしにも死期が訪れたのじや」

「……それはお仮の毒に、ちなみに何歳くらいだったの？」

「ひつちひびきの500歳じや」

「……十分すぎるわよ。天寿を全つしこるよ」

「むー おぬし向氣に酷いトジヤの「ハ。まあハハニツイわけで、わしは死んでしもうたわけじやな」

「」愁傷様でした

「……なんか受け答えに適当感を感じるんだじゃが？」

「氣のせいでしょう。被害妄想だ」

「そうかの……？ では続けるが。しかしだ！ わしは死ぬ直前に、ある魔法で自分の魂をこの場所へ飛ばしたんじゃよ！」

「……なんでもまた？」

聞かない方がいいかなとは思つたんだ。

思つたんだけど、流れで聞いてしまった。

すると遠慮なく爺さんはぶつちやけた。

「だつて……せっかく鍛えたのにもつたいないじやろ？ 魔法もす『』この沢山覚えたんじやし？」

「こやいやこやいや。それこそ俺の知つたことじやないだろ？」

あきれてものも言えなことはこのことだ。

そんなもん他所やれと。

主に俺に迷惑のかからないといひで。

「まあやつ言わず。元気じやが弟子達もわしそぞの器はなかつたんじやよ。

最後の魔法も伝えられんでのう。だからわしは死ぬ直前にすべての魔力を振り絞つて、わしの魔法と魔力を受け継ぐ素養のあるものに

すべてを託そうと考えたわけじゃ…」

えっへんと、このあたりになつてみると入れ歯でも飛ばしそうな興奮具合だった。

同時に俺との温度差もすごいことになっていたが、その辺りはどうでもいいらしく。

「それで俺のところに来たと……わざわざ異世界から

「その通りじゃ！ お前さんを探し出すのは苦労したんじゃよ？」

何ともめちゃくちゃな話に思えるのは俺だけだらうか？

しかし爺さんは、自分のやつたことむしろ誇りじばだというのをいつそう始末が悪い。

だがその内容事態は少し意外でもあつた。

爺さんが俺のところに来たのは、俺自身にも原因があるらしい。

顔立ちこそ少しハーフっぽいなんて言われる俺だったりするが、黒い髪も瞳も何の変哲もない日本人の基準からさう大きく外れてはいない……と思つ。

背丈も普通だし、そんなに目立つ方でもないだらう。

そんな俺に魔力なんて面白スキルがあるといつのがまず初耳だった。

「……俺に魔力ねえ」

ひょっとして俺って伝説の勇者の生まれ変わりだったとか？

……なんて面白こ妄想を考えてみたりして。

うん……ないな。

だいたいそれならそれで面倒くさそうだ。

「うむ！ そういうわけで、おぬしは自らの魔力とわしの魔力を併せ持つた、文字通り最強の魔法使いへと昇華するわけじゃな！ これぞ我が願い！ わしすらも届かなかつた高みへと遠慮なく駆け上つてくれい！」

爺さんは話をとても偉そとに締めくくると、そのまま期待に満ちた目でチラチラと俺の様子を伺つてこりみつだつた。

「……」

話はしつかり聞いた。

聞いたうえで考えれば、おのずと答えは見えてくる。

「帰れ

「なぜ？」

涙田で俺に詰め寄つてくる爺さん。

がつくんがつくん首を振られても、俺の答えは変わるものがない。

「いやだって、そんな魔法とか言われても正直引くし」

「引くつて君ね！ 異世界からわざわざ来た老人を追い返すかのー！
普通ー！」

「いや、だから俺となんも関係ないよね、それ？ ものすごく面倒
だし」

「むむむ、言ひよるのう……だがもう遅いんじゃよ。言つたである
うへ、これはわしの我儘じやと」

突然俯き、しかしどこか悪い笑顔の爺さんに何やら嫌な予感がした。

爺さんは最初なんと言つただろうか？

確かにう言わなかつたか？ この夢は覚めることがないと……。

「……あんたまさか

「そのまさかじやー 無理矢理でも行つてもらつたー！ もはや後
戻りなど出来はせん！ この夢から目覚める時ー おぬしは強制的
にわしの世界に転移することになるじゃねー！」

ビシッと爺さんは本当にくでもないことを田一一杯宣誓してくれた
のだった。

「いやー 一連の説明は前ふりのよつなもので、結局俺は異世界と
さりげなくさつ込まれる感じ。

「……誘拐じゃんか

「知らんもん！ わしさこれから死んでしまつんじゃもん…。そんなの知ったこいつちやないわい！ せつかくだから快く旅立つてもらおうと思つたが、もう知らんもんね！」

「！」の爺め……開き直りやがった

それはもつ見事な、駄々っ子も真っ青な開き直りつぱりだった。
呼びとめよつと手を伸ばすが、爺さんは素晴らしげ速で遠ざかってゆく。

そしてビックリか漏れ出る神々しい光の中にゅくつと溶けていった。

わざわざわやかな笑顔で「ひかり」手を振りながらだ。

「じゃー 良い異世界ライフを願つてあるぞー よかったのうー！
これでいきなり世界最高の魔法使いの誕生じゃー おぬしの完成した姿が見られんのが残念じやー！」

「聞いてないー！」

「ちなみに役に立ちそうなわしの魔法も最低限無理やりぶち込んでやるから安心せいー 存分に使つてやつてくれーー！ ……まあ、生きておればじやが？」

「だから聞いてないって……何その補足！ 怖いんだけどー！」

「では幸運を祈る！　なるべく死ぬなよ！」

「祈るな！　とこつか死ぬかもしれないのか？！　やーんといひなつ
きつしてくれえー！」

俺の叫びはむなしく木靈するのみだ。

健闘空しへ、爺さんはすこぶるこい笑顔で成仏していったのだつた。

「なんだつたんだいったい……」

結局七色の空間に一人取り残された俺。

「うつよつもなく、ただただ啞然とするしかない。

「……あの爺さん、勝手な事ばかり」

爺さんの言葉を丸ごと信じるなり、俺はこれから異世界とやらに行
かなければならぬいらし。

「……はあ、脱出方法もわからぬいし、強制なうつよつもな
い
か」

途方くれながら、ぼんやりと呑へ俺。

残念ながら爺さんの言つ通り、黒変はすぐに表れる。

俺は意識がどこかに流れていいくような不思議な感覚を味わつてい
た。

全部夢でありますよ'うに……。

そう祈りながら 紅野 太郎は不本意だが異世界へと旅立出されたのである。

実に不本意だが。

大事なことなので一回言いました。

「んあ……」

なんだか肌寒い。

俺が再び皿を開けると、二つの間にか見知らぬベッドに寝かせられた。

中途半端に生暖かいベッドの中はなんだかじいりやんつぽこ匂いがある。

「…………」

「まごとやつと歯も、皿に呑じてひしゃべ頭が回り始める。

俺は布団から飛び起きたが、ズキリと頭が痛んで、まごとやつの黒い毛をくしゃりと抑えた。

「いたたたた……。なにがあつたんだっナ?..」

寝すぎた後のよつこ頭が痛い。

その他には怪我もなによつだが、ふわふわと体の感覚はまだ頼りなかつた。

「うわ……ほんと元気だよい」

そしてなにより部屋の窓から外を眺めて、俺は驚きの声を上げた。

見知らぬ森が広がっている。

斜面が多い所を見るとビーナスリーブの中らしい。

そのせいか妙に肌寒く、体に染み入つてくるような冷気が漂ついて、俺はブルリと身を震わせた。

ただその震えは、必ずしも寒さのせいだけではないのかもしれない。

「……夢じゃなかつた？」

先ほどの不思議な夢を思い出して、俺は何とも気の抜けたため息を吐き出した。

どうにも現実味がない。

だがこのわけのわからない状況その2も、やはり原因はあるの夢くらいしかい思い当たる節はなかつた。

「どうなつてんだか。ありなのかね？　いつこうのも？」

あえてポジティブに考えるなら「こんなゲーム染みたイベントに巻き込まれた俺すごくね？」とか？

……しまつた、全然歓迎出来ない。

まあでも、こうなつてしまつたものはじょうがないか。

人間諦めが肝心である。

それよりも今は、現状把握が最優先だろつ。

俺は今いるこの家を、とりあえず家探しすることに決めた。

整然とした室内には、まだ人の気配が残っている。

それは埃の積もっていない床だったり、まだ食べられそうな食料だったりするのだけれど、しかし実際に人がいる様子はなく、物音一つしなかつた。

「……それにしても殺風景な部屋だな」

感想を口にしながら手当たり次第に部屋をあさつてみる。

時間を費やす」と一時間ほど。

結局人つ子一人見つけることは出来なかつたが、唯一の成果は最初にいた部屋にぽつんと置かれた一通の手紙だった。

「……あやしい」

しかしこの手紙、ものすごく胡散臭い。

俺は口元に手を当てて、手紙を眺めながら唸る。

さてどうしたものか？

恐る恐る手に取って眺めてみるが、宛名らしきものはない。

しかし差出人は十中八九あの爺さんだろ？。

開けるべきか、無視するべきか。

しかし何の手がかりもないのはわかっているのだ。

結局俺はそれを開けるしかなかつた。

封筒から二つ折りにされた手紙を取り出すと、手紙には見たこともない記号が書かれていた……のだが。

「……見たこともない文字なのに読めるな」

不思議なことに内容が理解出来てしまつたのだ。

こうあつさつとわかりやすい異変が体に起きている以上、本当ににかれてしまつたらしい。

やつてくれる。

心の中で毒づくが、しかしこの際便利なので良しとしておこう。

肝心の手紙には「遺言」と書き記してあつた。

「遺言か……つてことはやつぱりあの爺さんだよな」

たしか死んだとか言つていたし。

だがしんみりする時間すらも俺には与えてはもらえなかつた。

「 ぬおつー。」

思わず悲鳴を上げる。

本文を読もうと折り曲げられた手紙を開いたら、こきなりマグネシウムを燃やしたみたいな閃光が俺の眼球を直撃したのだ。

目がシバシバする。

痛む目を抑えながら、とんだトラップに俺は一瞬でも爺さんに同情した自分を悔やんだ。

「 ぐおおお、おのれ目が……あの爺さんホントひくな」としないなー！」

数秒して、よつやかく光が収まつたらしく。

頃合いを見計りて瞼をゆっくりと開くと、溢れた光が小さなビーチボールくらいの大きさで手紙の上に浮いていた。

そして光からぼんやり映像が浮かび上がってきたのだ。

3D映画も真っ青である。

しかも映し出された人物はそのまましゃべりだした。

『 ここの手紙を読む者へ。これを聞いてみるとこいつとはおなじく四喚は成功したんじゃね？』

『 気分はどうじやね？』

「……最悪だよ爺さん、ついかわい話をしたくな

もつ一度この顔を見ることがなるとは思わなかつた。

それは間違いなくあの爺さんだった。

いつぞ手紙だと床に叩きつけたい衝動に駆られたが、今は貴重な情報源だ、我慢する。

少しばかりイライラしながら続きを待つてみると、爺さんは淡々と用件を語りだした。

『それではさつそく君に与えた力の説明をしておこう。まず君は異世界の者でありながら、じつらの文字を理解出来た事に困惑していると思つ。

これはわしからのプレゼントージや。

わし自ら調整した翻訳の魔法をかけさせてもらひた。これによつて君はこの世界のあらゆる言葉を理解し、文字を読み解く事が出来るじゃつひ。

ああ、だからわざと文字を読めたのか。

魔法便利すぎるだろ？

この魔法があれば俺も学校で補習を受ずにすんだに違ひない。

それは置いておくとして、爺さんはこよに本題に入るよつだつた。

『そして、ここからがメインじゃ。君には全部で七つの魔法を吹き込んでおいた』

「たつた七つかよ」

『たつた七つかよ？ とか失礼な事思つたじやん？』

「……」

台詞予想するなし。

しかし七つか。

あえて七つに絞つた意味が何があるのだろうか？

すると爺さんはちゃんと説明も用意してくれていたようだつた。

『だがこの七つこそ魔法の基礎にして、魔法を究めたと謳われる我が集大成でもある』

「ほつ……って言つてもなあ、本当に大丈夫か？」

思い出されるのは夢に出てきた爺さんの人柄だつた。

なんというか……何とも頼りないのだが。

『まあ心配せずとも大丈夫じゃ、まずは基本となる五大元素魔法の五つじやな。

この世のモノはおおよそ五つの元素より成り立つてゐると言われておる。

それは「地」「水」「火」「風」「空」の五元素である。

七つの中、五つはその元素にそれぞれに対応した基本の魔法じや。

この五つの魔法がすべての魔法の基礎となる。

つまりこれを覚えておらねば、他の二つの魔法は使用も出来んというわけじゃ。

一般的には攻撃魔法や属性魔法などとこいつのない呼ばれ方をしておるので、身を守るために使つのもよからず『

「完全に会話を先読みされてる……なんか悔しい。五大元素ねえ、いよいよ RPGとかカードゲームみたいだな」

実は属性とかそういう小技でちょっとわくわくした。

俺だつて、TVゲームくらいならしたことがあるのだ。

『それでもう一つは分析魔法。物や人を分析する魔法じゃな。これを使えば人物の力量や、物ならばそれがどうやって構成されているかすら読み解く事が出来る。

つまりこの自分の知りたい情報を対象から引き出す魔法じゃ。これを聞き終わつてから、自分にこの魔法をかけてみると戻りじやろづ。

驚異的な魔力量を見て驚くこと間違いなしじゃ！

ちなみに魔力量については、わしら基準でお前さんにて理解できるよう魔法を調整してある。

一般的な魔法使いを1として、わしは1000ほどじゃった。
それを上乗せしたのだから、いったいどれほどになるか……楽しみ

じゃうひっく。

この値は、わしが設定した帝国標準の魔力値なので覚えておいて欲しい

「結局自慢かよ。あれか要するに女の子のスリーサイズも計れるわけだな？ 工口魔法か」

『H口いのはおぬしの頭じや』

「……ホントにただの録音かこれ？」

そして映像の爺さんは最後に黙り込み、セリフを無駄にためる。いい加減じれ始めた頃、おもむろに空氣を作りながら語りだした。
『そして最後に……これぞ我が秘奥にして最高の魔法。心せよ。」
れぞ究極の魔法なり』

「お？ いきなり重々しい導入に入つたな？」

しかし究極とか最高とか大好きな爺さんである。

ただこれだけ自信満々なのだから、最後の魔法とやらにもちよつとだけ興味が出てきた。

もつともそんな興味はすぐにクエスチョンマークに変えられたが。

『最後の魔法、それすなわち魔法創造じやー。』

ビビーんと本当に効果音付きで爺さんは言つた。

「無駄に演出に凝りやがつて……」

俺はといえば結局意味の分からなことを言つて首をかしげただけだったが。

「想像」？いや「創造」かな？

と言ひと魔法を作れるとかか？

だとしても、そんなもの作れたって何の知識もないのだからどうしようもないと思つんだけど？

そもそも魔法がなんのかさえ怪しいの！」。

当然のことながら、爺さんは俺に構つことなく続きを語り始めた。

『発想と魔力を糧に、世界より魔法を引き出す神技。そしてわしがおぬしをこの世界に呼ぶ事になった最大の理由でもある』

「へえ……そいつは迷惑な話だ」

『魔法とは、魔法使い達が少しずつ世界の秘密を解き明かして作り出した望む現象を起こす術だと言われておる。過程を省いて結果を導き出すような、世界を歪める技こそが魔法なのだ。故に魔の法。誰が名づけたのかは知らんが、的を得ていろと思つ。その代わりに魔法使いは魔力を対価として世界に差し出す。この魔法は、本来なら自ら解き明かさねばならぬ方程式を世界から直接引き出す魔法である』

「うむ、わけがわからない。

『それは思いつきで魔法をすぐさま作り出せると言ひじりじゃ』

だが続く爺さんの台詞に、俺もなんとなくその凄さがわかつてきた。

確かにそれは反則だらけ。

そしてこの魔法さえあれば他にどんな魔法も必要ない。

なにせ、したいことがあれば出来る魔法を引っ張つてくれればいいのだから。

こんなにうまい話はないだらけ。

『ただしこの魔法には欠点があつてのう。

魔法を引き出す事、それ事態に恐ろしいほどの魔力が必要なのだ。簡単な魔法でも、生半可な実力では干からびることになるじゃらけ。難易度の高い魔法を創造しようとすればさらにコストは高くなる。だからこそ、わしはこの魔法を弟子達に教えなかつた。

もし教えていたのなら、魔法の深淵にたどり着くために弟子達は命も惜しまずにつここの魔法を使い、そして死ぬ事になつたじやろけ。しかし、今のおぬしなら……わしに匹敵する魔力を持つおぬしならば、修行次第ではさらなる魔法を引き出すことも出来よう。出来る事なら、良心に従い、その力を有意義に使つてくれるることを祈つておる。

ではさあねじやー』

一方的にしゃべり続けた爺さんの満足げな顔を残して映像は消えていった。

案の定、その魔法には何かしらのデメリットがあるようだつた。

本田一度田のお別れだが、俺の頭にまだけりも演出過多な爺さんだったなあと見当はずれな感想が浮かんでいた。

「……なるほどね。恐ろしく勝手な爺さんだ。自慢したい気持ちはわからないでもないけどさ」

あの爺さん自身も、これは自分の我儘だと黙っていたが、それは確かに我儘だったらしい。

最高の魔法をそのまま幻にしたくなかったから、俺を無理やり巻き込んででもこんな大がかりなことをやらかしたのだろう。

やり方こそ褒められるものではないが、その努力が並々ならぬものであったことは想像に難くない。

しかしそれ、それでも悔しかつたはずだ。

こんな大層なものを作り出せやらねばならなかつたんだから。

そんな爺さんに俺はなんとなく黙祷を捧げておいた。

まあこれくらいはしておいてもいいだろう。

しばらくして顔を上げると、俺は気分を切り替えてせっかくだからその魔法とやらを試してみることにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3882ba/>

八百万ってたくさんって意味らしい

2012年1月10日23時51分発行